

大阪の 社会福祉

2019.12

775

The social welfare
in OSAKA

- 元気通信 鶴見区 焼野地域から
小さくてもキラッと光るまちづくり
地域、PTA、学校が足並みを揃えて
居場所いろいろ てんとうむしカフェ(中央区)
当事者がイキイキとおもてなし
〜めざすは街ごと家族〜
- 2
- 都島区 みやこじま防災大作戦2019
- 3
- 東住吉区 こどもの居場所の風土をつくるう!
- 4
- 西淀川区 中央区 コーディネーター 超交流会
- 5
- 第74回大阪市民生委員児童委員大会
- 6
- こんなことやってます! 私たちの施設から
社会福祉法人ひがしよしがわ福祉会
障がい者生活介護事業所 あすわ〜く
- 7
- 8



社会福祉 大阪市社会福祉協議会

<http://www.osaka-sishakyo.jp>

大阪府下からボランティアが集まり、それぞれの思いを胸に活動しました

協 社 市
区 社 協

被災地支援

引き続き、寄り添った支援を

長野市災害支援ボランティアバス運行

10月に上陸した台風19号の被害は全国各地に広範囲にわたっており、11月19〜21日(車中2泊)、大阪府社協が大阪府社協・堺市社協と合同でボランティアバスを運行。復興へのそれぞれの思いを持ったボランティア20人とともに、大きな被害が発生

した長野県長野市へ支援に向かいました。

長野市では市内を流れる千曲川の堤防決壊により、広範囲で浸水被害が発生し、住宅や農作物などへの被害が集中しました。

ボランティアバスが、現地に到着したのは、20日の朝。長野市災害ボランティアセンター(以下、災害VC)で受付を済ませ、活動場所へ向かいます。

被災地での主な活動は、りんご農園や神社、家屋の床下の泥だし。当日は気温が低く、時折り小雨が降る中、これまで災害ボランティア活動を経験している人から、初めて活動に参加した人へ土嚢袋の紐のくり方や活動のコツを伝えるなど、チームワークを発揮しました。

りんご農家の人からは「家も浸水してしまい家の片づけが大変で畑に行けなかった。ボランティアがいなければ、りんご農園まで手が行き届かなかったのでもっと助かりました」との言葉をいただきました。活動を終えたボランティアからは、「想像していた以上に被害が大きかった」「りんご農園でいただいたりんごの味が忘れられませ

(2面に続く)

HB

大人になってから障がい者になったという若者の話を聞いて驚いた▼とび職をしていてビルの6階から転落

▼1か月半集中治療室で意識がなかったというのだ。脊髄損傷で、首から下は全く動かすことができない。死にたいと思ったけれど、自分で死ぬことすらできなかったとか。退院後自宅へ帰ったが、家族が出て行っただと、彼はさうさと言った▼奥さんと子どもは、体は動かないけれど口だけ達者な彼と一緒に暮らすことを、望まなかったようなのだ。ヘルパーとボランティアの手を借りて、一人暮らしをしているのだとか▼一緒に話を聞いた若者は、下宿暮らしは誰だって辛いのに、この体でよくそんなことができるものだと、感動しきり。ヘルパーの帰った後の夜はいつまでたっても不安だという彼。水一杯も自分では飲めないのだから▼けれど、一人暮らしも楽しいもんだと、彼は笑い飛ばす。施設や病院と違って自由だし、自分でものを決めることができる。カラオケだって、登山だってできるし▼ヘルパーとボランティアのおかげで、今では障がい者になって死のうと思ったことが嘘のように思えると笑ってくれた。(石)

(1面より続き)

「支援先の方々からはこころよく受け入れていただきよかった」などの声がありました。



りんご農園で泥だしの活動

福島県郡山市災害ボランティアセンターへ職員を派遣

大阪市社協では各区社協と連携しながら、10月25日から福島県郡山市災害VCに職員を派遣し(11月末日現在、延べ5人派遣)、近畿ブロックの府県・指定都市社協とともに運営支援をおこなっています。

郡山市においても、阿武隈川の氾濫により、甚大な被害が出ました。被災エリアも点在しており、支援が必要とされている住民の方々がおられます。

郡山市災害VCでは、よりスムーズに運営できるよう複数のサテライトを開設し、ボランティア受付、被災された方々のニーズ受付とボランティアのマ

ツチングを実施。困りごとがないか一軒ずつ住宅をまわるなど被災状況の確認、また支援状況のマップピングをおこなうなど状況把握に努め、地元住民や関係機関、郡山市社協職員とともに支援しました。多くのボランティアが支援に訪れ、畳上げや泥だし、家財道具の運び出しなどの活動をされました。

現地は2か月近く経過し、住民のニーズも移り変わってきたことを受けて、12月2日から「生活支援ボランティアセンター」に移行し、生活再建に向けたさまざまな困りごとの相談等に対応できるよう、引き続き支援しています。

市社協・区社協では、一日でも早く復興することを祈りながら、引き続き寄り添った支援活動を展開していきます。



ボランティアに説明する本会派遣職員



元気通信

鶴見区 焼野地域から

小さくてもキラッと光るまちづくり～地域、PTA、学校が足並み揃えて～

10月26日、焼野小学校では、開校10周年記念式典がおこなわれ、400人の卒業生、教職員、保護者、地域の役員

などが参列した。

焼野小は、茨田北小の過密化解消のため、茨田北小の分校として誕生。新しい小学校を創るために、地域は、開校約1年半前から開設準備委員会を発足し、校名をはじめ、決めごとを学校と丹念に話し



こどもも地域も成長できた10年 (写真中央：中田会長)

合い、基盤づくりに尽力した。準備が整った2010年4月、焼野小創立とともに焼野地域(連合振興町会)を立ち上げ、学校と地域が手を取り合って、スタートしている。式辞の後、全児童による「よろこびのことば」では、みんなで作った校歌への愛着、学校や地域への素直な思いがはつきりと言葉で伝えられた。その立派に成長した姿は、10年間、温かいまなざしで、こどもたちを見守ってきた関係者の目を潤ませた。

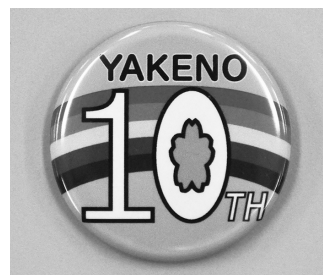
連合振興町会の会長・中田俊二さんは開校当時をこう振り返る。「PTAもない、資金もないなか、小学校の新設、連合の立ち上げ、右も左もわからぬままの活動で私自身

だ、小さくてもキラッと光るまちにしたい、他の地域に追いつき、追い越したい、という気概を持って、無我夢中で駆け抜けてきた」。

小学校と二人三脚で歩んできた道のりは、未来をつくる「こどもが主役」だった。こどもが主役のイベントは、親、祖父母も寄りやすい。地域行事が充実するとともに、町会の会員数は増加し、10年前の1200人から1600人となっている。支えてくれた地域住民への感謝を込め、年に一度、焼野小学校庭でのもちつき大会では、180kgのもち米をつき、ぜんざいや焼きもちなどをおふるまっている。

3月の焼野小卒業式には、焼野地域の発展を願い、児童、保護者、地域住民が描く将来や夢などを詰めたタイムカプセルを中庭に埋設。2030年には20周年を記念して、大人になった卒業生、関係者が集まって開封セレモニーをおこなう予定だ。

「焼野地域が形になり、積み重ねが歴史になったことは嬉しい。次の10年も、学校、PTA、地域と足並み揃えてがんばっていききたい」と中田会長は力強く語った。



全校児童で考えた「10周年記念マーク」の缶バッチ

市社協 大阪市社会福祉大会

「福祉によるまちづくり」をめざして

本会は10月30日、大阪国際交流センターにて大阪市社会福祉大会を開催し、約1200人の来場があった。

第1部の式典では、宮川晴美会長があいさつをおこなった（写真）。わが国では、多様な課題が複雑化・深刻化しており、従来の福祉の枠組みを超えた横断的な取り組みが求められている。本会は地域福祉を推進する中核的な団体としての役割を果たすため、各区社協をはじめ、関係団体との連携を一層強化し「一人ひとりの人権が尊重され、誰もが自分らしく安心して暮らすことができる、やさしさとぬくもりのある福祉によるまちづくり」の実現に向け、取り組みを進めていくと述べた。

その後、多年にわたり地域福祉の推進に尽力され、その功績が顕著な社協役員やボランティア、長年にわたり功績のあった社会福祉施設・団体従事者などにに対し、市社協会長および市長から表彰状・感謝状が延べ63団体・641人に贈呈された。

次に、白國哲司副会長が朗読した「大会宣言（案）」（要約）では「『地域共生社会』の実現に向け、本会では、「担い手」



「居場所」「見守り」の3つの重点目標を掲げ、大阪市地域福祉活動推進計画を策定したが、推進2年目の本年は1年目の評価・検証をふまえ、取り組みを進めていく。「居場所」の一つである「地域こども支援ネットワーク事業」については、今後地域住民をはじめ、社会福祉法人や企業など多様な団体の参画により、一層充実していく。また、近年大規模災害が多発しているが、平時から災害を見据え、見守り活動の取り組みを住民と共に進めていかなければならぬ。本会は福祉に関わるすべての機関や地域の人びとの厚い信頼に応え、「福祉によるまちづくり」を推進していく」と宣言し、原案通り採択された。

第2部では、書家の金澤泰子さんによる「ダウン症の娘（こ）と共に生きて」と題した講演をおこなった。

居場所 いろいろ

-16-

秋晴れの10月27日、中央区の桃谷会館で「てんとうむしカフェ」が開かれ、120人を超える多くの参加者たちで賑わった。屋外のテーブルには、高齢者だけでなく、こどもたちをキッ

ズコーナーの学生ボランティアに託し、ひと休みするパパやママたちの姿が。この日は、オープンカフェの開放的な雰囲気の中、医療・介護の相談コーナーへ、カフェのチラシを手に持ち、認知症の当事者の方も家族とともに相談にきていた。

カフェでもてなすのは、若年性認知症等の当事者の方10人。受付やホール係などそれぞれの役割がある。当事者の方がより楽しくスムーズに活動できるようマンツーマンでサポートしているのが、区内の事業所等の専門職だ。看護師、理学療法士、ケアマネジャー、社会福祉士、精神保健福祉士、薬剤師など、医療・福祉の専門職が連携して協力していた。また、カフェを利用する人々もあたたかいまなざしで活躍を見守る。

医療法人みんと会理事長で医師の西原承浩さんに、カフェオープンへの思いを聞いた。「在宅医療を進める中で、地域には在宅



理事長の西原さん

当事者がイキイキとおもてなし

～めざすは、街ごと家族～

～めざすは、街ごと家族～

サービスが必要な人が多いことを痛感した。サービスが必要な人も地域の中で自然に過ごせるようカフェはある。そこで、産直野菜、身体にいい飲食、こどもの遊び場、イベントなどいろんな要素を取り入れている。桃谷地域社協会長の原田壽幸さんも「地域が一つになれるよう協力したい」と応援する。

食事メニューは、共同主催の合同会社てんとうむし代表で、栄養士・調理師でもある、佐藤裕子さんが千早赤阪村道の駅と連携して作った新鮮な野菜や果物で調理している。ちなみに今日のメニューは、きのこ、トマト、いちじく、黄桃入りの「免疫カアップカレー」だ。

11月末には、天王寺区の認知症カフェ「みんなの家」で野菜マルシェ＆カフェをオープン。「就労の場がない、高齢者、障がい者、こども、学生、いろいろな人が共生し街ごと家族になれたら」と西原さんはカフェの発展に期待を込めた。



和やかな雰囲気でおもてなし

てんとうむしカフェ

- ・主 催：医療法人みんと会・合同会社てんとうむし
- ・日 時：月1回、不定期開催
- ・場 所：桃谷会館
(中央区上本町西2-5-25)
- ・対 象：どなたでも
- ・料 金：カフェメニュー100円～300円
- ・問合せ：06-6777-9006 (みんと会)

こどもから大人まで楽しく学べる

みやこじま防災大作戦

2019

子育て層が多数来場

11月9日、区社協主催で第3回「みやこじま防災大作戦2019」がおこなわれた。体験をしながら、防災への意識を高め、理解を深めてもらうのが目的だ。

イベントの企画者の一人、区

社協地域支援担当の紙屋なつみさんは「3

年前に社協内で災害対策委員会を立ち上げた。防災訓練だけでなく、楽しいイベントが必要と考え開催してみたところ、いろいろな層の方が来場され手応えを感じた。防災を通じて、社協のことを知ってもらえる機会にもなっている」と話す。



臨場感あふれる避難体験VR（バーチャルリアリティ）には行列が

さまざまな世代の地域住民が

訪れるなか、今回は、小学校、保育園はじめ、広く公共施設にチラシを配架し、ボランティア情報誌『COMVO』にも掲載するなど広報に力を入れたため、子育て層の参加が増えたという。

行列ができた
避難体験VR

イベントは「体験する」「学ぶ」「楽しむ」の3つの柱で大人もこどもも参加しやすい内容だ。「体験する」では、「避難体験VR」「煙テント体験」で災害の恐ろしさを感じ、「学ぶ」では、水害時の応急対策に必要な「土のう積み体験」、子育て世代に関心の高い「災害時の食物アレルギー講座」、紙芝居付きの「防災クイズ」などで役立つ知識を身に着ける。「楽しむ」は、いろいろ



さまざまな種類の味を体験することができた「非常食食堂」



協力して土を詰める「土のう積み体験」

で口を押え、しゃがんだまま、非常灯を頼って2分で非常口へ脱出する。途中「エレベータに

な非常食を集めた「非常食食堂」のほか、「よし笛作りワークショップ」「東北震災復興応援グッズの販売」「わくわく抽選会」「スタンプリリー」など、区社協の各階や屋外のオープンスペースに組み入れられている。

行列ができた避難体験VRでは、VRゴーグルをつけ、火災時のリアルな避難を体験する。非常ベルが鳴り響くビル内で、ハンカチ

協力団体と
盛り上げていく

乗りますか？」という体験者への質問を客席のモニターでみていた人が「あかんで！」と注意するほど臨場感があり、無事脱出した後は、拍手が起きた。

イベントをおこなう度に、区内の個人・企業・団体からの協力者が増えている。土のう積み体験を指導するのは「淀川河川レンジャー」を務める地域の住民、食物アレルギー講座の講師は、生活支援コーディネーターが関わった薬局の管理栄養士だ。また、防災ライブラリーに並べる本は、子育て事業でつながった図書館が貸し出すほか、紙スリッパづくり（区役所）、煙テント体験（消防署）と公的機関も協力した。さらには、同時開催として、今年度からスタートした区社協とファミリーマートがコラボする地域の居場所「カフェまーぶる」、生活困窮者自立支援事業で活用する食品を受け付ける「フードドライブ」がブースを出した。

紙屋さんは「3回のイベントを通じて、社協内の防災意識が高まり、協力団体とのつながりも強くなった。防災の重要性が浸透するよう、このような機会を地道に積み重ねていきたい」と語った。

子どもの居場所シンポジウム

子どもの居場所の風土をつくろう！

地域で創る子どもが主体となる居場所づくり

子どもは地域の宝

11月2日、東住吉区民ホールで「子どもの居場所シンポジウム」が開催され、市民、民生委員、地域の活動者、関係者等、約180人が集まった。

第一部は、大阪教育大学・新崎国広教授の基調講演。「子ども食堂」の今日的意義として、「社会的孤立をなくすために、すべての住民一人ひとりが幸せを実感できるまちを、子ども支援の活動を通して、住民が学校や行政・社協・各種専門職と力を合わせて自分たちの手で作り上げる『みんなの居場所づくり』である」との考えを述べた。また、子どもを取り巻く状

況は厳しく、裕福であっても人間関係が希薄化している社会的貧困や、周囲との格差を感じるような相対的貧困など現状についても理解を求めた。

そして、「子どもは地域の宝。地域で大切に育てられたい子どもは、地域を大切にしたい大人になるでしょう」とまとめた。

多様な子どもの居場所の活動報告

第2部はパネルディスカッション。まずはNPO法人ハートフレンドの徳谷章子さんが活動を報告。開所から15年以上経ち、「利用者だった人たちがスタッフになり、協力してく

校しにくい児童などの支援の事例をあげて、「学校との連携が強いことが特徴」と話した。

次に活動を報告した東田辺子どもなかよし食堂は、地域のボランティアが中心。調理や配膳を時間で交代したり、遊び場専門の人がいたり得意分野を活かして関わっている。地元商店街や学校の協力もあり、子どもたちの様子を見守っている。発表者の松下由佳子さんは「地域の人々が気軽に立ち寄れて楽しめる、安心できる場所にしていきたい」と語った。

で活動が始まったという。現在はお店または団地の集会所を借りて月6回ほど、子どもたちに食事を提供をしている。スタッフは本業を持っていて人が多いので、時間のやりくりに苦労しているという。「場所も人も時間も課題ですが、今後も人と人をつなぐ場所していきたい」と抱負を語った。

理解が深まり活動の広がりを

当日参加した東住吉区の民児協会長の桑野太一郎さんは「日頃おこなっている見守り活動も居場所づくりに通ずるものがあり、地域一体となってみんなを取り組んでいきたい」と話す。

また、区社協の地域支援担当主査の吉田美幸さんは「居場所連絡会議で検討しながら、みんなの力で今回初めてシンポジウムを開催できた。子どもの居場所づくりの活動を知ってもらい、理解の輪が広がれば」と今後の思いを語った。



大阪教育大学 新崎国広教授

新崎教授

「子どもは地域の宝」をテーマに、平日は「てらこや」を開き、学習支援をおこなったり、夕方には地域の人たちとご飯をつくる「ワイワイクッキング」も継続している。また、登



左から徳谷さん、松下さん、伊藤さん



子ども支援活動のパネル展示

コーディネーター超交流会

さらに地域での見守り活動をすすめるために

地域福祉活動支援コーディネーターを中心に、地域の見守りサポーターを組織化し見守りを進める西淀川区。一方、地域福祉コーディネーター自身が見守りの担い手の中心となり進める中央区。見守りの進め方も事業も異なる2区のコーディネーター同士で意見交流を図ることで、活動に活かせるヒントをつかむことを目的に、10月10日、中央区社協で交流会が開催された。

2区それぞれの見守り活動を紹介

まずは西淀川区から、見守り相談室管理者の松原有告さん



区を超えてお互いの活動・思いを共有

と、竹島地域のコーディネーターの伊原享子さんが発表した。竹島地域では、サポーター同士が見守り活動を定期的に進捗確認する「振り返りの場」をきっかけに、認知症の疑いがある人を地域包括支援センターに早期に橋渡しし、できた事例を紹介。地域で気になった人を発見した時に、コーディネーターに相談がつかえるように日ごろからの関係づくりにも取り組んでいると報告した。

次に、中央区から、見守り相談室管理者の児泉景子さんと2人のコーディネーターが発表した。大宝地域の水上幸子さんは「5年前は訪問してもなかなか会うことができなかった方に、粘り強く声をかけを重ねるうちに、少しずつ話せるようになった」と継続していく大切さを語った。また、玉造地域の高木義一さんは、毎月見守り訪問をしている中で、久しぶりに訪れたお宅では、逆に見守り対象者から励ましの声をかけられたりと地域でのつながりを感じられる事例を報告した。



小野教授



交流会終了後の一枚

その後、桃山学院大学社会学部の小野達也教授が各事例のポイントを解説。まず「西淀川区の『振り返りの場』のような、活動者が集う場で互いを高め合い、励まし合うことは大切」と強調。また「中央区の大宝地域の事例のように、成功した時はなぜうまくいったのかを考えることで、経験として積み重ねることが出来る。玉造地域の事例では、双方向で見守る形ができているので理想的」と語った。

交流会をきっかけに、さらなる活動へとつなげる

続いて、参加者が8班に分かれての交流会では「見守り活動の工夫点」など、活発な意見交換が

あった。参加者が8班に分かれての交流会では「見守り活動の工夫点」など、活発な意見交換が

見守り活動へつながる機会となり、地域住民がこれからも住み慣れた地域で暮らし続けてほしいと願いながら、できることをしていきたいという思いが感じられた。

第74回大阪市民生委員児童委員大会

10月7日、大阪府立国際会議場で、大阪市・大阪市民生委員児童委員協議会の共催により、第74回大阪市民生委員児童委員大会が開催され、市内の民生委員・児童委員約2500人が参加した。

大会式典に先立ち、各区民児協会長及び大阪市関係者により、民生委員制度の前身である方面委員制度の創設に尽力された林市蔵元大阪府知事像への献花式がおこなわれた。

第1部式典では、物故民生委員児童委員への黙祷、民生委員児童委員信条及び児童憲章の朗読、民生委員児童委員協議会事業報告に続き、表彰式がおこなわれた。本年は、30年の長きにわたり活動され、市民児協の運



営・発展にも寄与された白國会長へ「林記念賞」が、15年以上継続して活動された330人の委員に「永年勤続表彰」が、それぞれ市長から贈られた。

大会宣言（案）では、100年以上にわたり、地域の「良き隣人」として活動を重ねてきた諸先輩の志を受け継ぎ、民生委員・児童委員、主任児童委員の役割を再確認するとともに、地域の身近な相談相手として、一層地域での取組みをすすめていくことを宣言。採択された。

第2部は「DVや虐待のない社会を目指して」と題し、虐待やDVなどにより社会で生きづらさを抱える少女や若年女性に寄り添い、彼女たちに関わる支援者のネットワークづくりに取り組む「若草プロジェクト」代表理事の大谷恭子弁護士による特別講演。虐待を受けた彼女たちが、日々虐待の連鎖に怯えている現状など虐待が与える影響は大きく、誰か一人でも信頼できる大人が関わり続けることが、「DVや虐待のない社会」につながるという話に参加者は熱心に聞き入り、地域に根ざす民生委員・児童委員、主任児童委員だからこそできることを改めて考える機会となった。

らい予防法は1996年に廃止された。その後、ハンセン病患者らは根拠なく隔離政策を進めたい予防法を違憲と提訴し、熊本地裁は違憲判決を下して国の賠償を認めた。そしてこのたび、患者の家族に及んだ人権侵害である偏見・差別について元患者家族が提訴した。2019年6月に熊本地裁は国の隔離政策によって家族が差別偏見にさらされる社会構造ができた、

と国の責任を認め、そして同年11月15日に参院で「ハンセン病問題の解決の促進に関する法律」改正、および「ハンセン病患者者家族に対する補償金の支給等に関する法律」が可決された。家族にも人生被害が甚大であったことを改めて我々は知ることとなった。家族と離れた生活を強いられ、家族としての関係形成過程をなく奪われ、情緒的な影響の他、残された家族たちが

たちに波及し、多くの損失を伴うカーティシー・ステイグマ（courtesy stigma）があると社会学者のゴッフマンは指摘する。筆者は過去に葉害HIV感染被害者家族（遺族）の聞き取り調査の経験がある。そこで遺族となつて20年以上経た母が、現在も地域住民の視線におびえ、心身の健康を崩し、「私は籠の鳥」と語った声が今も心に残る。他にも精神障害者の家族は過

家族にもおよぶ偏見・差別の 深淵を知ることから

大阪市立大学大学院 生活科学研究科 助教 清水 由香

所属する各々のコミュニティにおいて耐え難い差別を受けてきた。そして、直接的差別被害に加えて、差別を受けるのではないかという不安や怖れに由来した生活自主規制行動の状況も深刻であった。家族は人間関係で、また進学、就労や結婚の機会などで、家族の存在を隠匿し、その苦勞や心理的葛藤を重ねていった。ステイグマには、ステイグマのある本人から、親しい者

去、保護義務者としての法的な役割を定められ、家族としての重荷を社会的にも心理的にも負っていた。疾患以外にも差別・偏見の対象は地域、文化、多様に存在し、その差別は本人の他、親、きょうだい、親族、配偶者、など多くの人々に波及している。その深刻さを私たちは理解し、向き合い、そして効果的な啓発や教育戦略を模索していかなければならない。

風をよむ

東淀川区には以前、地域に根ざした「淡路障がい者共同作業所」と、視覚障がい者を支援する「すくらむ共同作業所」がありました。この2つの作業所が社会のニーズに応じて1つになり、2002年に「あすわ〜く」が生まれました。淡路の「あ」、すくらむの「す」、作業を表す「わ〜く」の組み合わせが、名称の由来です。現在の定員は36人で、民家を借りて定員4人のグループホームも運営しています。

利用者は、本人の障がいの状況や希望を考慮し、配食、陶芸、軽作業、ビーズの4つの班で活動されます。配食班は、隣に✓

の装飾品などを制作します。個性を生かし、こだわりの自主製品をつくる利用者もいます。



野菜の下準備(配食班)

ビーズ班の自主製品や、陶芸班の完成品は、区役所のロビーや区民まつりなどで販売します。このような機会は、私たちの活動について地域の方々に知っていただけるきっかけになります。さらに、障がい者施

4つの班の活動を通して、地域と、社会とつながる

ある診療所と協力し、高齢者向けの宅配弁当づくりに取り組みます。利用者は野菜の下準備や盛り付けを担当。衛生面に気をつけながら、高齢の方々の食を支えます。陶芸班では、タタラ機を使って粘土を板状に伸ばし、それを型に貼り付け、形をつくっていきます。みんなでアイデアを出し合いながら作品づくりに取り組みます。軽作業班では、ケーブルを壁面に固定するステップを組み立てるほか、リサイクルのために、アルミ缶を回収、整理し、潰したものを集積所に持ち込みます。地球環境にやさしい取り組みです。ビーズ班は、ビーズを使ったアクセサリーやキーホルダー、季節

設が集まって開催する「スポフェス」や「障がい者との交流フェスタ」などにも参加し、多くの人々に私たちのことを周知する機会を得ています。そのほか、学びの場として役割を果たすため、中学生や大学生などの福祉体験を受け入れています。

これまで約20年間、利用者第一の姿勢で運営してきました。障がいの有無に関わらずともに互いを理解しつつ、幸せに暮らせる地域づくりのため、今後は「あすわ〜くまつり」といった地域交流イベントの開催も視野に入れたいと考えています。

住所 〒533-0014 大阪市東淀川区豊新1-3-3
Tel 06-6815-7166 HP <https://aswork.net/>

こんなことをやっています！

私たちの施設から♪

28

社会福祉法人 ひがしよどがわ福祉会
障がい者生活介護事業所
あすわ〜く

祝 各種表彰

市・区社協、民生委員児童委員協議会(民児協)の主な関係者の受章は次のとおり。(敬称略)

◆秋の叙勲・褒章

- <旭日双光章> (産業振興功労)
橋詰 源治 (鶴見区民児協会長)
- <瑞宝単光章> (統計調査功労)
矢田貝喜佐枝 (市社協副会長)
- <藍綬褒章> (社会福祉功績)
多田 親正 (城東区民児協会長)

◆市民表彰

- <区政功労>
一本松三雪 (市社協評議員・天王寺区民児協会長)
- <社会福祉功労>
久保田 清 (福島区民児協会長)
- 多田 親正 (城東区民児協会長)



市社協 善意銀行
株式会社ケーエスケーから、社会創立20周年を記念し、地域貢献活動として、車いす20台を寄贈いただきました。
11月1日の贈呈式では、大阪第一営業部長の久井繁嘉さん(写真左)へ感謝状を手渡しし

立ちどまらない保険。
MS&AD 三井住友海上

三井住友海上の安心

GK

クルマの保険 火災の保険 地震の保険

www.ms-ins.com

地域子ども支援ネットワーク事業
シンポジウム

子ども食堂からみんなの居場所へ

日時/令和2年1月19日(日) 13:00~16:30
場所/阿倍野区民センター大ホール

申込み・大阪ボランティア・市民活動センター
お問合せ先 TEL.06-6765-4041

定員 600人 参加費 無料
事前申込み制・先着順

詳しくはホームページにて

地域子ども支援ネットワークの事業に子ども食堂を核として、居場所づくりを進めています。

した。
寄贈された車椅子は、大阪市老人福祉施設連盟を通じて、市内の社会福祉施設において、有効に活用させていただきます。